ネヘミヤ記9章 「民の罪の告白」

1A 教えに基づく告白 1－4
2A 神の正しさと憐れみ 5－37
1B 主への賛美 5－6
2B イスラエルの歴史 7－31
1C 約束を果たされる方(アブラハム) 7－8
2C 苦難をかえりみる方(出エジプト) 9－15
3C 反抗を赦される方(荒野の旅) 16－19
4C 恵みを与える方(約束の地への旅) 20－25
5C 苦しみを許された方(士師記) 26－28
6C 捕囚にもあった神の憐れみ(列王記) 29－31
3B 真実に対し悪を行った民 32－37
3A 神との盟約 38

本文

ネヘミヤ書 9 章を開いてください、私たちのネヘミヤ書の学びは後半部分に入っています。城壁再建が完成して、かつての帰還民の系図を確認し、それから律法の朗読に入りました。その時に、彼らは自分たちの罪が示されて悲しんでいきましたが、主を喜ぶことがあなた方の力なのだと励まされ、喜びの祝いをしました。そして仮庵の祭りに入ります。本来、イスラエルが命じられていた祭りを、なんとヨシュアの時代からしていなかったのですが、それをすることのできた喜びは、ひとしおもありませんでした。

彼らの中で始まった霊的復興、リバイバルは続きます。次は、祈りへの献身です。みことばを熱心に聞いて、それに応答する中で、主に自分たちの罪を告白するのに、長い時間を割きました。聖書というのは、私たちに過ちを示してくれます。「Ⅱテモ3:16 聖書はすべて神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」教えによって、自分のしていることが誤っているとする戒めが与えられます。多くの人たちが、自分の感情において、自分が正しいことをしたか、間違っていたかの正否を決めてしまって、聖書の基準を吹き飛ばしてしまうことが多々あります。しかし、聖書のみが正しい基準を私たちに与え、それに基づいて聖霊によって、どこで誤っているかを示されるのです。

1A 教えに基づく告白 1－4

1 その月の二十四日に、イスラエルの子らは集まって断食をし、粗布をまとって土をかぶった。2 イスラエルの子孫はすべての異国の人々と関係を絶ち、立ち上がって、自分たちの罪と先祖の咎

を告白した。3 彼らはそれぞれ所定のところに立って、昼の四分の一は、彼らの神、【主】のみおしえの書を朗読し、次の四分の一は、彼らの神、【主】に告白をして礼拝した。4 ヨシュア、バニ、カデミエル、シェバンヤ、ブンニ、シェレベヤ、バニ、ケナニはレビ人の台の上に立ち、彼らの神、【主】に向かって大声で叫んだ。

仮庵の祭りは第二十二日に終わりました。一日を挟んで、彼らは続けて律法の書によって神の取り扱いを受けていきます。御言葉を聞く時を持ってから、これまでの罪を告白していく時を持ちました。断食をすることは、自分の普段している、自分の肉体を養う営みを一時やめ、霊的なことに集中するためです。粗布を着ることは、敢えて自分を痛めるためです。ラクダの毛皮のほうを肌に当たるように身に付ければ、そうとう痛くて痒くなります。そしhて、土をかぶることは、悲しみと嘆きを表します。自分たちの今までのあり方を深く探り、思い直す大切な時間です。

そして、彼らがバビロン捕囚の原因となったのは、ソロモンの時から始まった偶像礼拝です。ソロモンが晩年に、数多くの外国の女を妻とし、その外国の女たちが持ち込んだ神々をそのまま拝ませるに任せました。そのために、罪がイスラエルの中に入っていたのです。そこで、異国の人々との関係を絶ちました。パウロがこう言いましたね、「Ⅱコリ 6:14-16 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。15 キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。16a 神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。」

具体的には、一日の四分の一、つまり六時間は律法の朗読に、それから六時間は告白と礼拝に捧げたとあります。ここでの「告白」は必ずしも、自分の至らなさを言い表すだけではありません。神のすばらしさと慈しみも言い表していきます。これを六節から読むことができますが、日本語で人間的な表現を使うならば、「有体に話していく」ということです。神ご自身を神ご自身として見ていき、また同時に、その神の前で自分たちがどうなっていたかも有体に話していくことです。そして、民に代わって、レビ人が台に立ち、主に向かって大声で叫んでいます。

2A 神の正しさと憐れみ 5－37

1B 主への賛美 5－6

5 レビ人のヨシュア、カデミエル、バニ、ハシャブネヤ、シェレベヤ、ホディヤ、シェバンヤ、ペタフヤは言った。「立ち上がって、あなたがたの神、【主】をほめたたえよ。とこしえからとこしえまで。あなたの栄光の御名はほむべきかな。すべての祝福と賛美の上に高く上げられて。6 ただ、あなただけが【主】です。あなたは天と、天の天と、その万象を、地とその上のすべてのものを、海とその中にあるすべてのものを造られました。あなたはそのすべてを生かしておられます。天の万象はあなたを伏し拝んでいます。

主に対する、あらんかぎりの賛美から始まっています。多くの祈りが、賛美から始まっていますね。イエス様も、こう祈りなさいと言われた時に、「天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように。（マタイ 6:9）」と言われました。そして、主の栄光を見て喜ぶことが、今の苦しみを耐える力ともなります。使徒パウロは、「神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。それだけでなく、苦難さえも喜んでいます。（ローマ 5:2-3）」と言いました。レビ人たちのこの祈りは、今、ペルシアの支配の中で苦しんでいることを吐露する祈りで終わっています。しかし、その苦しみの中でなお耐えることのできるのは、主の栄光を見上げる時です。

2B イスラエルの歴史 7－31

彼らの主への告白は、7 節からなんと 9 章の最後の方、37 節まで続きます。そのほとんどが、イスラエルの歴史そのものを辿っています。彼らが律法の朗読で聞いてきたことを、そのまま主に対して話しています。聖書を通読すれば分かるでしょうが、モーセがイスラエルの歴史をそのまま話しました。ヨシュアも話しました。祈りの中で、ダニエルが悔い改めをして、同じように話していきました（9 章）。そして、新約時代に入れば、パウロが、ピシディアのアンティオキアにあるユダヤ教会堂で、イスラエルの歴史を話しました。そして有名なのは、ステパノのサンヘドリンにおける説教です。彼はアブラハムから始めて、ソロモンの神殿のところまで話しました。ヘブル書 11 章は、やはり旧約の聖徒たちの歴史をたどっている説教になっています。

なぜ、そのように話すのか？それは、その話そのものに神の語りかけがあるからです。その話そのものに、神ご自身の栄光、ご性質、そして神の民とされたイスラエルのありのままの姿が現れているからです。その歴史を自分自身も追体験しながら、そして自分の立ち位置を、今いるところを確かめるのです。

このようにして、自分たちが自分たちの思いや考えで、イスラエルとはこのようなものだとする自分勝手な解釈を避けることができるからです。バビロンにユダヤ人が捕え移されて、しかし少数の者たちが残ったけれども、その彼らまでがエジプトに逃げた後に、エレミヤが語りました。バビロンはここまでやってくると警告しました。「エレ 44:16-18「あなたが【主】の名によって私たちに語ったことばに、私たちは従うわけにはいかない。17 私たちは、私たちの口から出たことばをみな必ず行って、私たちも父祖たちも、私たちの王たちも首長たちも、ユダの町々やエルサレムの通りで行っていたように、天の女王に犠牲を供え、それに注ぎのぶどう酒を注ぎたい。私たちはそのとき、パンに満ち足りて幸せで、わざわいにあわなかった。18 だが、天の女王に犠牲を供え、それに注ぎのぶどう酒を注ぐのをやめたときから、私たちは万事に不足し、剣と飢饉に滅ぼされたのだ。」」まるで反対ですね。天の女王にいけにえを捧げている時に、このようなことを続けていたらバビロンによって裁かれるというのが主のことばで、それが実現したにしかすぎません。しかし、近視眼になって、このような歪んだ判断しかできなかったのです。

しかし今、聖書に書かれている通りに正しい歴史認識に立って、自分たちの行動を変えていこうという決意に立っています。私たちも、神のご計画の全体を知り、そこに立って今の生活をどのように変えていくかを考え、祈っていく必要があるでしょう。

1C　約束を果たされる方（アブラハム）　7－8

7 あなたこそ神である【主】です。あなたはアブラムを選んでカルデア人のウルから連れ出し、その名をアブラハムとされました。8 彼の心が御前に忠実であるのを見て、あなたは彼と契約を結び、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、エブス人、ギルガシ人の地を彼の子孫に与えるとされました。そしてその約束を果たされました。あなたは正しい方だからです。

イスラエルの歴史は、アブラハムから始まります。彼がカルデア人のウルから連れ出されて、それで彼が神を信じる姿を神がご覧になっていて、それで、約束の地を与える契約を与えられました。ここで祈っている彼らは、「あなたは正しい方だからです」と言っています。主は確かに、約束を果たされて、今、彼らが立っているエルサレムを含めたイスラエルの地をくださいました。その真実を正しいと言っています。約束されたことは必ず果たす、こういう真実を正しいということです。正しさとは、信頼に関わることですね。アブラハムは神を信頼して、それが義とされました。神は真実をイスラエルに示されて、ご自身を正しいとされました。

2C　苦難をかえりみる方（出エジプト）　9－15

9 あなたはエジプトで私たちの先祖の苦難を見て、葦の海のほとりで、その叫びを聞かれました。10 ファラオとそのすべての家臣、その国のすべての民に対して、数々のしるしと不思議を行われました。彼らが私たちの先祖に対して傲慢にふるまったのを、あなたがみこころに留められたからです。こうして、今日あるとおり、あなたは名をあげられました。

これはもちろん、出エジプト記の話です。主は、彼らの先祖の苦難を見て、その叫びを聞かれました。エジプトのファラオは傲慢にふるまったのですが、しかし主はそれを用いられて、ご自分の栄光を現し、名を挙げられました。当時の世界に広まり、イスラエルの神はこういう方なのだという恐れを抱かせました。

11 あなたは私たちの先祖の前で海を裂き、彼らは海の真ん中の乾いた地面を渡りました。追っ手は、奔流に呑み込まれる石のように、あなたが海の深みに投げ込まれました。12 昼は雲の柱の中にあって彼らを導き、夜は火の柱の中にあってその行くべき道を照らされました。

紅海を分けて彼らを救われ、その後も荒野での旅を、雲の柱と火の柱で守って行かれました。昼は灼熱ですから、雲が与えられます。夜は光でもあり、冷えますので温かさも与えられ守られました。過酷な荒野の旅において、このように主は彼らを憐れみ、守ってくださったのです。私たちに対

しても、同じですね。コロナにおいても、私たちを守ってくださっています。

13 あなたはシナイ山の上に下り、天から彼らと語り、正しい定めと、まことのみおしえ、良き掟と命令を彼らにお与えになりました。14 あなたの聖なる安息を彼らに教え、あなたのしもべモーセを通して、命令と掟とみおしえを彼らに命じられました。15 彼らが飢えたときには、天からパンを与え、渇いたときには、岩から水を出し、彼らに与えると誓われたその地に入ってそこを所有するよう、彼らに命じられました。

主は、イスラエルの民を聖なる民とされました。何をもって聖なのか？といいますと、正しい定めとまことの掟を持っているから、ということであります。神の掟、その正しい定めを持っている民は幸いです。飢えをしのぎ、渇きを癒すこともなさいましたが、それも幸いですが、神の正しい掟を知り、また安息によって神をあがめることのできるということは、何にもかえがたい喜びです。

3C 反抗を赦される方（荒野の旅） 16－19

16 しかし彼ら、私たちの先祖は傲慢にふるまい、うなじを固くし、あなたの命令に聞き従いませんでした。17 彼らは聞き従うことを拒み、彼らの間で行われた奇しいみわざを思い出さず、かえってうなじを固くし、かしらを立てて、逆らって奴隷の身に戻ろうとしました。それにもかかわらず、あなたは赦しの神であり、情け深く、あわれみ深く、怒るのに遅く、恵み豊かであられ、彼らをお捨てになりませんでした。

ここから、レビ人たちが、自分たちと先祖たちの罪を告白し始めます。彼らはこれから、繰り返して告白していきますが、そのまとめ、結論から見ますと、33 節の言葉になります。「あなたは真実を行われましたが、私たちは悪を行ったのです。」主は真実を示しておられます、これだけよくしてくださっています。ところが、一時の不都合や不快なことが起こると、そこまで導かれた神の真実を顧みず、不信になって、元いたところに戻ろうとするイスラエルの姿がありました。カデシュ・バルネアでの出来事です。恵まれ、良くしてもらえているからこそ、逆にその恵みを恵みとしてみることが出来ず、近視眼になって目の前にあることで不満になり、その恵みを台無しにします。

18 彼らが自分たちのために鋳物の子牛を造り、『これが、あなたをエジプトから導き上ったあなたの神だ』と言って、ひどい侮辱を加えたときでさえ、19 あなたは大きなあわれみをかけ、彼らを荒野に見捨てられませんでした。昼は雲の柱が彼らから離れず、道中を導き、夜は火の柱が、行くべき道を照らしました。

この時に、イスラエル人は死にましたが、それでも彼ら全体が滅ぼされることはありませんでした。滅ぼされるのは当然の報いですが、しかしそれでもなおのこと神は彼らを見捨てられず、変わらずに雲の柱、火の柱で彼らを導かれたのです。神は、このように「情け深く、あわれみ深く、怒るのに

遅く、恵み豊かであられ」る神なのです。

4C　恵みを与える方（約束の地への旅）　20－25

20 あなたは、彼らを賢くしようと、ご自分の良き霊を与え、彼らの口からあなたのマナを絶やさず、彼らが渇いたときには水を与えられました。21 四十年の間、あなたは彼らを養われました。彼らは荒野で何も不足することなく、上着はすり切れず、足も腫れませんでした。

主は、彼らに憐れみを注いだだけでなく、恵みを注がれました。憐れみとは、本来なら受けなければいけない報いを受けずに済むことです。恵みとは、本来、受けるはずのないものを受けて入ることです。マナが与えられる、水が与えられる、四十年間、上着は擦り切れず、足も腫れない。これが、エジプトに戻る！と言ってみたり、金の子牛の前で乱れていた者たちが受けるべきものでしょうか？主は、受けるに値しない者にこのような恵を与えられます。

22 あなたは諸王国と諸民族を彼らに渡し、それらを領地として割り当てられました。彼らはシホンの地、ヘシュボンの王の地と、バシャンの王オグの地を所有しました。23 あなたは彼らの子孫を空の星のように増やし、彼らの先祖たちに、『入って行って所有せよ』と言った地に、彼らを導き入れられました。24 その子孫は入って行って、その地を所有しました。あなたは、この地の住民、カナン人を彼らの前に屈服させて、その手に渡し、王たちとその地の人々を、彼らの思いのままに扱わせました。25 こうして、彼らは城壁のある町々と肥えた土地を攻め取り、あらゆる良い物に満ちた家、掘り井戸とぶどう畑、そしてオリーブと果樹を、豊かに手に入れました。彼らは食べて満腹し、肥え太って、あなたの大いなる恵みを楽しみました。

ヨルダン川の東岸を北上して、そこにいる住民を追いはらい、二部族と半部族がそこに住むことになりました。そしてヨルダン川を渡河して、そこにいる住民も追いはらいました。そして、自分たちが努力しなかった、肥えた土地が与えられ、家、井戸、ぶどう畑、オリーブと果樹を豊かに受けています。棚ぼたの恵みです。彼らは、「満腹し、肥え太って、大いなる恵み」と表現していますね。ここに恵みの豊かさが書かれています。

5C　苦しみを許された方（士師記）　26－28

ところが、です。民はなおのこと反逆します。

26 しかし、彼らはあなたに逆らい、反逆して、あなたの律法をうしろに投げ捨て、あなたに立ち返らせようとして彼らを戒めたあなたの預言者たちを殺し、数々のひどい侮辱を加えました。27 そこであなたは彼らを敵の手に渡され、敵が彼らを苦しめました。彼らがその苦難の時にあなたに叫び求めると、あなたは天からこれを聞き入れ、あなたの大いなるあわれみによって救う者たちを彼らに与え、敵の手から救われるようにしてくださいました。

これは、士師の時代です。彼らは、バアルやアシェルに仕えるようになりました。預言者が遣わされたのに、殺したり、侮辱を与えたりしました。人は、苦しむから悪いことをして、ならば、豊かにされたら善を行うのか？というとそうではないことが、はっきりしますね。むしろ、このような神から良くしていただいているので、かえって恵みを忘れ、高ぶり、偶像崇拝に走ってしまうという、人間の罪深さがあるのです。それは、放蕩息子にもあった性質でしょう。父に愛されているのに、分け前を生前に受けて、遠い国に生き、放蕩の限りを尽くしました。父にどれほど愛され、恵みを受けていたのか、その恵みの中にいたからかえって知らなかったとも言えます。しかし、遠い国で豚のえささえ食べたいと願ったほどになった時に、我に返りました。

同じように、ここで主は、彼らが敵の手に渡されることを、そのままにされました。彼らは敵から守られるのが当たり前になっていました、空気のようになっていました。けれども、それで反抗していたので、神は強いられるようにして、その守りの手を一時、引き留めておられたのです。私たちも、恵みを恵みだと思わない罪から遠ざからないといけません。自分たちが当たり前にしていることが、実は当たり前でないのだということに気づき、日々の神の恵みに感謝するのです。

28 しかし、一息つくと、彼らはまたあなたの前に悪事を行いました。あなたは彼らを敵の手に捨て置き、敵が彼らを支配しました。彼らが再びあなたに叫び求めると、あなたは天からこれを聞き入れ、あわれみによって、たびたび彼らを救い出されました。

士師の時代、これがずっと繰り返されていました。士師がいなくなると、悪事を行いました。士師の時代の問題は、主のことばが広がっていなかったこと、そのために人に頼り、また、自分の目に正しいと思うことを行っていたことです。主が語られることよりも、自分の感じていること、思っていることを優先します。そして、主の前に自分が行くのではなく、指導者が行くのだから大丈夫だとして他人任せにすることです。

6C　捕囚にもあった神の憐れみ（列王記）　29－31

29 あなたは彼らを戒めて、あなたの律法に立ち返らせようとされました。しかし、彼らは傲慢にふるまい、あなたの命令に聞き従わず、その命令を行う人は、それによって生きるというあなたの定めに背いて罪を犯し、肩を怒らして、うなじを固くし、聞き入れようとはしませんでした。

彼らには、まだ列王記や歴代誌の編纂が終っていなかったのかもしれません。まだ、私たちのように書かれたものとして手になかった、なのでダビデ以降の時代、ソロモンと、その後の南北の王たちのことを、具体的には言及していませんが、王たちの時代のことを話しています。この時代には、預言者がエリヤを始めとして、はっきりと語られるようになりました。それなのに従わなかったのですから、それはここにあるように傲慢の罪です。主の語られていることが、あたかも悪であるかのようにみなす罪です。自分のしていることが正しく、神の言われていることがまるで間違って

いるかのような、そういう時代のことを指しています。

30 それでも、あなたは何年も彼らを忍び、あなたの霊により、あなたの預言者たちを通して彼らを戒められましたが、彼らは耳を傾けませんでした。そのため、あなたは彼らを地のもろもろの民の手に渡されました。31 しかし、あなたはその大いなるあわれみにより、彼らを滅ぼし尽くすことはせず、お見捨てにもなりませんでした。あなたは、情け深くあわれみ深い神です。

ついに、主はアッシリアとバビロンに、イスラエルの民を引き渡されました。ところが、そこにおいても囚われ人を残しておられたという憐れみがあります。帰還民がいるという自体が、自分たちがここに存在しているということ自体が、神が大いなる憐れみをかけて、見捨てられなかったことの証しです。エレミヤが哀歌で告白しました、「哀 3:21-22 私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。【主】の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。」

3B 真実に対し悪を行った民 32－37

32 私たちの神、大いなる神よ。力強く恐るべき方、契約と恵みを守られる方よ。今、アッシリアの王たちの時代から今日まで、私たちと私たちの王たち、高官たち、祭司、預言者、私たちの先祖、また、あなたの民全体に降りかかった困難をみな、どうか小さなことと見なさないでください。

イスラエルの歴史を辿った後に、主に対して、今の私たちの苦しみに目を留めてくださいと願っています。アッシリアの王たちの時代とありますから、これは捕囚が始まってきた以降の話をしています。異邦人の国に支配され、苦しみを受け、そして捕え移され、帰還してもまだ異邦人の支配に入っていることによって受けて入る苦しみです。

33 私たちに降りかかったすべてのことにおいて、あなたは正しくあられます。あなたは真実を行われましたが、私たちは悪を行ったのです。34 私たちの王、高官、祭司、先祖たちはあなたの律法を守らず、あなたがお与えになった命令と警告にも、耳を傾けませんでした。35 彼らは自分たちの王国の中で、あなたが下さったその大きな恵みの中で、また、あなたが彼らの前に置かれた、広くて肥えた土地にいても、あなたに仕えず、また自分たちの悪い行いから立ち返ることもありませんでした。

ここが、ダニエル 9 章にある祈りと全く同じです。今、異邦人の支配に入っていることを彼らは、神は不公正である、悪を行っていると責めませんでした。むしろ、これは神に言い逆らってきた自分たちの非のためであり、その裁きにおいて神の正しさが表れているだけであると認めているのです。ここに、まことの悔い改めがあります。それは、自分自身が責任を取るということです。自分が罪を犯したことを認めることです。環境のせいにするのではありません。ましてや、神のせいに

するのは愚かであり、冒涜ですらあります。いや、しっかりと自分のしてきたことを見つめるならば、自分を吟味するならば、神がいかに自分に良くして下さり、憐れんでくださっているのか、恵まれているのかわかるはずです。神は、あらゆる善を自分に見せてくださいました。

そして、その上で神の恵みに訴えます。自分の正しさではなく、神の恵みのご性質に訴えて、憐れんでくださる祈りをささげるのです。「ヤコブ 4:6 神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」と。それで、こう言われています。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」」

36 ご覧ください。私たちは今、奴隷です。私たちが実りと良い物を食べられるようにと、あなたが先祖に与えてくださった、この地で。ご覧ください。私たちは奴隷です。37 私たちの罪のゆえに、この地の豊かな産物は、あなたが私たちの上に立てられた王たちのものとなっています。彼らは私たちのからだを支配し、家畜も彼らの思いのままです。私たちは大きな苦しみの中にいます。」

ここで、彼らが最も苦しんでいたことを告げています。それは、かつて実りと良い食べ物が与えられるように先祖に下さった地で、未だ、ペルシアの支配の中で苦しんでいるという苦しみです。税が課せられるので、とても苦しんでいます。そのことを吐露しています。

3A 神との盟約 38

38 これらすべてのことのゆえに、私たちは文書をもって盟約を結んだ。そして、私たちの高官たち、レビ人たち、祭司たちはそれに印を押した。

10 章に、この盟約の内容が記されています。律法に歩むこと、他国の者たちと結婚しないこと、安息日に商売をしないこと、そして、神の宮のために献げ物をすることです。彼らは、律法をずっと聞いていき、その中で自分たちが何をしていったかを悟り、告白し、それでその認識に基づいて、新しい生活に変えていこうとしました。

私たちは、どうしても今の自分しか見えていません。自分にとって正しいことを選び取ってしまいます。聖書を見ていくことがいかに大切か、神のご計画の全体を知ることがいかに大切かを知ります。どんなに善を行っているように見えても、実は全く正反対のことをしていることさえあります。彼らは、律法を見て、イスラエルの歴史を見て、新たな歴史認識に立ちました。それに基づいて、生活を新しく変えていこうとしました。今、私たちはコロナウイルス対策で、新しい生活様式への変容が求められています。私たちキリスト者は、霊的に新しい生活へ変容していくように召されています。「ロマ 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」